特へ13
1281
1

本多文庫
村田

門 へ 13
號 1281
卷 1

千代曩物語自叙

嘗聞千代曩授機水桶咏嗒咏歌
藏在吾未見書乎不識其行狀夫
契舟識劍謂之愚乎以船秤象不
忘智乎吾直指如大尾之失智見
性猶以契舟以認其迂然識劍秤
象智与愚只在其人耳不俟恁麽道

亦是若破壊氷桶而欲湛閼伽焉

維時

文化四次丁卯年皐月望

武江金龍山下隠子振鷺亭

主人題于閑居明窓下　貞居

善岳散人書

題言

○斯書千代褻投機の和歌一首を以證とす其他は咸妄語なり釈氏四十二章経に狂言綺語を警む然はあれど是を緯に説ば亦是讃佛乗の因なるべきや但西の河原のほとりに生茨に見えたりといへども戯に沙を聚め塔を積も終に因縁となるは益千代褻の本佛の妙義に觸べ白丁と云る賽の河原の事とも書あらはしぬは称しつべし三國小女臈玉谷生邑が徒は劇場にのみ名ありて其傳何等の事なれや今此千代褻が事に混合せるは荒唐杜撰の太しといへども姑く戯文場の態とするものゝ嗚呼矍曇傚者一塲雑劇此書又一塲好笑矣

○此慎子が標題千代褻物語となす可なり俳優の所作に七變化といへる事ありなくるや豈不拙手と毀る人もあらめど夫儒に七教醫に七情兵に[illegible]七瀬の御祓古今に七指各々七の数に厥有旨或は緇流にいへる七佛[illegible]變化自在の義俗に七小町などいへるは人世七度變化せるの意なり

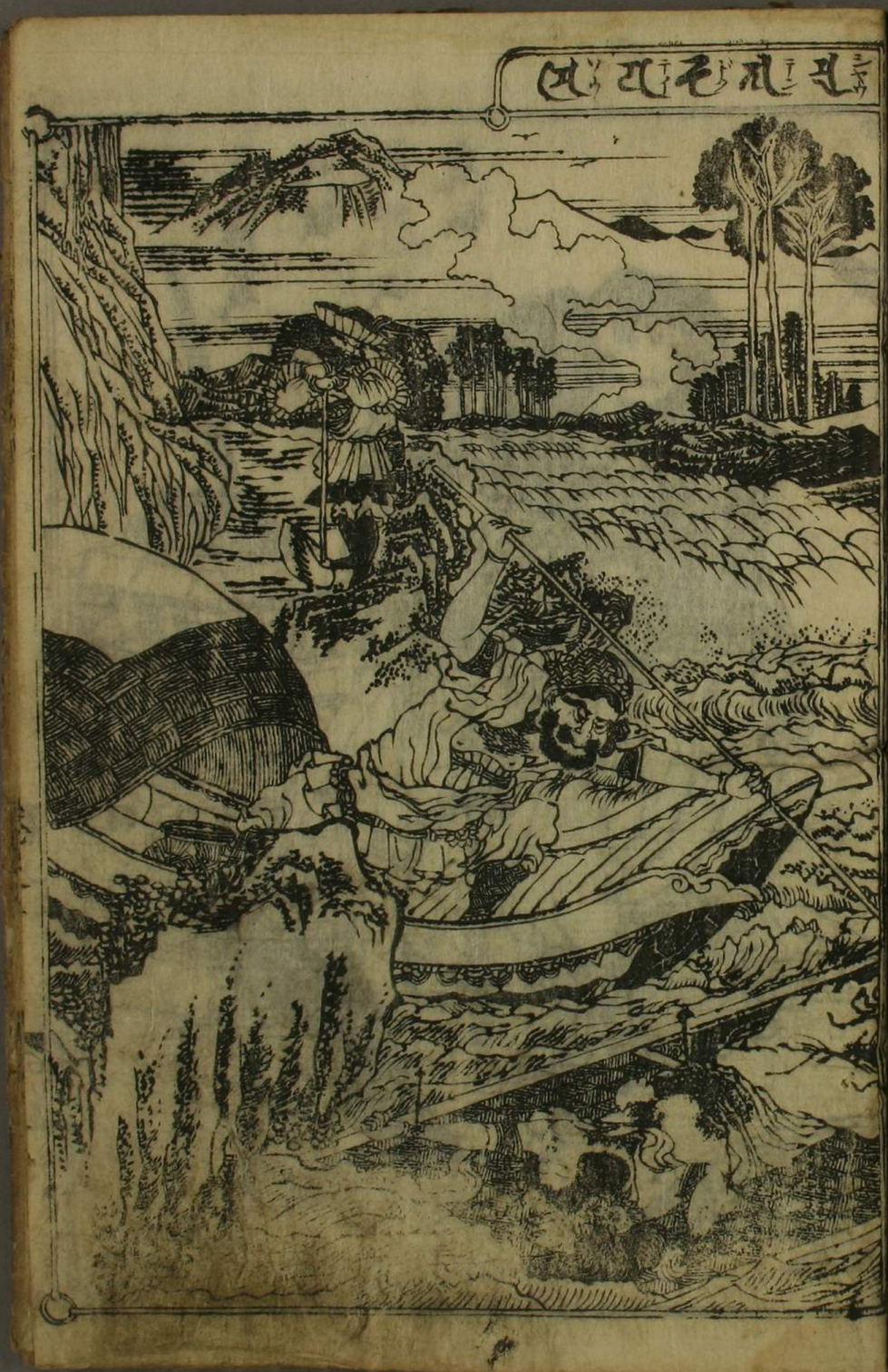
じく見るべし

○作意の旨帰する佛典に従る小家珍説自ら其異端を貴ぶ愚婦女として善を勧め悪を懲らしむる風呂に従事するが如き絢幽冥の異類奇怪乃多端なる佛説に託せんと言がごし

○又のくれぐ文八字下に打く讀に耐べくんや詞八俗語に岩り文字も正字を虚しくれども半音半訓交あり譬ば節會と云べき所せも音と和げ作る例まく俗に湯桁訓しく人是うの覽者とも實訓に非ずと紛して可うり又詩を綴て章句を積む文学の士に云べきあらずと顧夫人心喜易悪難此書初不為大作不加修飾蓋欲與童蒙觸事情而易諭也俗語荒燕復何恤為云爾

振鷺亭主人識

六祖生の捕
硯子の捕
拠華の捕
新水ろ捕
拾得ろ捕
鬼山の捕
葦の捕



善惡若
無ハ報
乾坤必
有ル私

善惡
到頭
終有
報

只爭
来速
與來
遲

昨日、羅刹心
今朝、菩薩面
羅刹與菩薩
不隔一條線

般若長者左京

妻荒妙

千代曩媛物語總目次

第一
一度ハ千代曩媛前生天竺神通川ニ若死ー本朝ニ生まるく
二度烈女ニなりて死ー鳥辺山ニ葬生く北國ニ落魄の事

第二
三度ハ越路の旅と經く木葉里ニ賊女と取成蠱ー三年の
千想万苦ニ堂て夫妻再會且二上山の毒蛇ニ煩悩る事

第三
四度ハ般若長者ニ姫妾くなり正妻荒妬が嫉妬の毒ニ終ニ
責讎ニ値く屍と北越の神通川ニ曝を明果た事

第四
五度ハ海ニ投ぜ立山の血盆池獄ニ種々飛量ニ苦々く
六度ハ山姥となりて嬰児成養育と千裁の蝶蛾報恩の事

第五
七度ハ雉行若行七年の変化ニ百折千磨ー遂ニ大悟
發明ー〳〵足くる已上鎌倉底脱井紀原の事

通計十五篇全五編

振鷺亭主人識

三國小女膳孝記
玉谷眞平忠義傳
出邑震平懲悪傳

千代曩媛七變化物語

東都　振鷺亭主人　述

第一　撰子

昔在天竺摩訶陀國ニ兄弟の者あり兄ハ鬼谷山ニ入く木を伐弟ハ采樵
ゐる葵紫舟ニ乗て〳〵撃て神通川ニ訴る時〳〵涼上ゆく人の屍と覚しきもの
水ニ浮ん〳〵波ニ堰とく流れ来るあり弟の樵夫聽く屍を擢ニ突住即此方
の岸ニ扯揚て祝ゆるとゝ破瓜ばかりなる女乃瓢ニ包つる沈一枚の掘戸の上ニ真平
ゐ〳〵て左右の腕左右の跗ニ鐵の釘と刺躓ちぐ母て鋌とゐ〳〵腹ニ
孕ると祝ゆるニ氷あると劍ニ衝立てぞありゆる此女性世ニ類なき美人
右眼左眼天眼の悪相あく咲るゞ如き顔ハ生き眠ゆに異ゐ〳〵樵夫ハ取

祝るゝ所のびと頓て哀傷を偽らして傍の兵を癒あんと世路を忽ち見あらゝ
拙人奉まりて斧鉞を以屍の首より絶破らんとすを弟ハ忙ちく是を止どゝ
吾此女人を埋葬して屍の墓廟を陰し遣てんとゝくるゝ你あんぞ妄言
ざるべしとゝ兄ハ怒て色吾此女人の肝膽を撮く薬とは金を換あんとあるを弟
の躬とゝてあんぞ妨とするとやと罵て是を奪ひとゝ切さるゝ事ハ尚も
さゝ也と是を拒ゝ兄弟既に闘諍あぞ逮くる奥ふ山居の喜見上人遥ふ
此侍を祝て急き山を下てゝく兄弟の者を宥ひ曾て示て宜く你等同果
の理を聴ゝ聴ゝそもく此女人ハ般若長者ゞ姫妾あるゞ正妻の妬毒ふ因て
世る非業の寂期を遂けるあり来世も又日本國ふ生をくゝの正妻ゞ為ふ千緒
万端躬と苦ゝめ万想ゝ量の難と經べし然ありて后終ふ其罪障を果方ふ大
智見性の德と成就して三国ふ稀ある女人とあり其名を千載ふ傳ゞ長者ゞ

妻ハ又此女人とゝく色ゞ嫉恚の業因問止ゞゝく生を惹て同く日本ふ生を
其躬毒蛇とありて苦悩を受永く怨憎の若輪ゞ脱ゞゞ般若長者ハ亦今ふ
憑慕愛執の感至く深ゝれべ来世も復妻妾の為ふ脳さるべし誠ふ恐ゝ
生死の苦輪あり你等兄弟も生ゞ日本国ふ生ゞ善哉ゝゝ弟ゝ宿世乃
善業ふ従く来生ゝあゝゞ兄と為り剛直の善男子ふして芳名代ふ
遣とゝ悪ゝ兄ハ宿業の悪執ふより適人間ふ生ることゝゝ旃陀羅と
為り攻盗とありて幾許の罪業を造て臭名を百年ふ流ゞゞ你慎やと惕ふ
ふゞ兄ハ只髪の垢を掻て是を嗅のゝあゞ回あくや有名聽て立さるゝ者ハ
上人ふ皈依して直ふ土と穿ち牛か女人ゞ屍を殮く瘞して上ふ印の石を置くとハ
其取喜見上人回向をゞ色ゞ人その陀羅尼讀誦の色力強とも不思議やあり
天竺の体相忽然と消失く乃是鹿景殿の裡とゞありふ者り

千代曩媛七變化物語巻之壹

東都　振鷺亭主人　著

一　序

俊季千媛證出約夫妻
玉吾出邑契義成兄弟

抑此麗景殿と申ハ本朝人皇九十五代の帝後醍醐天皇の御姫宮用堂禪尼御座とこゝ有り導師禪林寺の長老夢窓国師ハ何度ぞ佛法の神通力とゝんせ〳〵と望ひ名れば國師素より宿命通と得く寂然と眼を瞑ゐ明咒を誦し手ゐ印明を契ゐとひとゝく麗景殿須臾ゝ換畫して件の天竺の眸相と現世なりさゝぶ禪尼幻の間ゐ天竺の有様と御覽し今夢の酢〳〵るゞとく奇異の想ひ色ゐひ真ゐ不可思議の妙とぞ衆〳〵最敬せゐひ名る夢窓国師ひとく かゝる幻化のゆハ姑く利他の方便の〳〵みく実ゐ佛法の奈意よゆ〳〵ハ然ども自在神通の奇瑞と現ひ名ハ假諦門の契ゐ有り有用成事とそも無躰則空の理い〳〵るとぞ云ふ一物の所より無尽蔵の益もゆきハゆとり找佛法欲ぞ今ゐ云ふの躰相ハ凡せ奈せそれハ現世とも説ゐ云ひ名ハ今政所の入道文衡公の息女千代曩媛ハ正ゐ天竺の神通川と流し女人の屍の再来ゐり北山殿の二男俊若ハ摩訶陀國の般若長者ハ再誕ゐり北山殿乃家ハ子俱梨迦羅丸と申ハ名の撫夫の再来ゐり入道殿の家の子阿修羅丸と申ハ名の仙人ハ再来ゐ〳〵こそも又長者ハ妻ハ城中の国神通川の傍ハ正ゐく生と受ゐ名ハ此一業所感の人〳〵天竺の喜見上人未生と察し宣ゐ名ハ将来想ゐ合ゐるゆゑもゐてゆゑんとぞ宣ゐ名れハ禪尼ハ不思議の覚と周ゐ名ゐ名ゐ千代曩媛今世生死の苦患ゐ漂ひ名ゐり憂ゐ名ゐんと最思ひ名ゐり空ゐ名ゐ定ゐ名ゐ

ゆとて稍涕袖も濡めだりあり於茲用堂禅尼宿の用後
ゆ任せべ〳〵とく今年俊若ハ七歳千代曩媛々五歳なれ
夫妻の契約とぞとて締せゆ其中号の証ありとて竜
赤龍子と丹砂ゆ湯〳〵罌ゆ畜其色真朱のごく赤うし
件ゆ蝘蜓乃血とのく俊若と千代曩媛の臂ゆ塗せゆ
其痕癍とありて濃紅の色ゆ染とりかゝて用堂禅尼諭
て宜く昌ゆを虫のきゝ〳〵といふあり好るき詩ゆも臂上守宮
何日消鹿惹ゆ化落涙如雨とゆ康惹ハ宜男草の事ゆ
此蝘蜓の血癍いゆ洗拭ふとも更ゆ剥る支るゑんさうれども
淫る行ある時ハ速ゆ消失るあり　和ゆ曰ゆ寺ゆとと妹背の
盟とゝて後を盡未来際迄互ゆ貞ゆ節即義と守侍へと

戒ゆひ〻ゆ稚ゆゆも御詞と辱とゝて俊若忘るなよ
たゆさゆ汚け虫の色と言ゆゆ千代曩媛あせてゆ人ゆ
いゆ〻ゆ苔んとゆさゆ汚虫の色乃あせてゆ人ゆいゆ〻ゆ
忘るゆよたゆさゆ汚虫の色乃あせてゆ人ゆいゆ〻ゆ
と不覚一首の和哥とありゆるゆ不測ゆれさゆゆ尼公乃
教戒とゆ〻ゆ刻〻終ゆ貞女節夫の躬行と經緯〻ゆ正
ゆ此蝘蜓の縁故とぞ問へゆさても又禅尼宿世の余縁ゆゆ
べとゝ俱利迦羅丸と阿修羅丸と義を契〻兄弟とゆ
ゆゆ欧ゆ俱利迦羅丸ハ歳長〻ゆ兄とあり左手の拳指
と断て盟とゝ阿修羅丸ハ背ゆ俱利迦羅の龍と黥去て
誓とあり俱利迦羅丸長〻ゆ逮く玉谷真平英忠

と名詮く先其躬の長六尺八寸腰の廻七尺有余力八十余人と合せ弓箭打物とふく人の後に立夏ゐく只一途に命沢主恩に抱て奉仕し士君流離の後も艱苦の中に附纏奉りて竟に恢復の功績とゐせし学鰻の忠臣ゐ阿徒羅丸ハ豪に異て為人極く狼戾ゐして人をあざり怒んじたる事思ひ雖して主君の館を逐電して行方知ず酒色に沈て乱く中に狂業とし加之盗竊とゐ世を恣に竟に禁獄せられしが大赦に遭てふ〜ざゐ命助たるど都のうちゐ狭く何地ともなく影と匿しぬ素相摸治良時行が落胤ゐく母ハ越前の三国出邑の廓乃妓女ゐりる出邑震平林行と名詮て奸臣賊子の名を獲四二名が善悪の行状往々讀得く知るべきる程に歳次一旬ゐ〜ふり元弘三年ゐもゐり俊若既に十八歳其年の除目に橋本中将俊季朝臣ゐ任ぜられて従五位普く朝野ゐ聞あり千代曩媛も十六今年二十八とゐり恋ゐ金谷手樹の春乃花臨地に落ゐ秋の月七墻西子も新粧を恥絳樹青琴も紅顔を失ゐ御有様ゐ見ゐ聽く中将殿ゐ嫁し初ゐ〜と人く曩媛ざるゐ〜ふり〜るゐ寡も夢窓国師過現来の察し知ゐ〜思ひ懸べき事ゐ〜ね不詳の災害を起ゐり

第二

俊季朝臣權死伐野
千代曩媛魁鳥邊山

武臣相摸守平高時君を蔑し上代昌く逆威を鎌倉ゐ振し竟ゐ高時ゐ一門以下一時ゐ滅亡して四海ゐ〜ふり〜く穂ゐる所ゐ北山の槐門公宗卿謀叛の思ひ被立し其由縁ふるき義もゐりそも衣ゐる承久合戦ゐ人ゐくて坐ゐるも偏ゐ高時擧薦の厚恩ゐりと被思ゐるゐ〜いふゐ故相摸入道ゐ一族とゐりて再び天下の權を取せ我身朝廷ゐ執政ゐ

夏と願ひ〻く政所の入道文衡公と計て故高時の子息時興其甥時行と
京都の大將ゝて畿内近國或越中能登越前乃勢を催して明暮
謀叛の計畧を回し事大平記に見へたり　さて後醍醐天皇御遊を好せ給へは
北山の紅葉叡覽と称〻臨幸を勸め奉て主上を殺し
奉らんと潛ふ謀定るゝ舍弟橘本中納俊季朝臣此隱謀の企を畧
猜し玉ひく大ひに嗟嘆あり吾豈又こと子ら道ふ陷さんやとく殆精忠を
て諫め玉ふ是の公宗卿も舍弟の諫言ふ恥ゝ蜜ふ文衡入道殿ふ南禪寺
ある入道殿思維あり　俊季朝臣と千代曩媛ハ用堂禪尼の御
媒妁ふく申合ひ玉ふ十年ともつるとハ今般昵あさハ某とハ婿舅
の間ふあぬくよも違背有ゝ〻ゝとやさ〻ふ公宗卿妙ありと喜びて
急ふ婚儀を偖〻れ既吉辰ふもありく北山殿ふ入輿ぞある時千代曩媛ふ